

恋染め笠
(全)

山手樹一郎

恋染め笠（全）

光風社書店

恋 染 め 笠

昭和四十八年七月二十五日 印刷
昭和四十八年八月十五日 発行

定価 五二〇円

著 者 山手樹一郎

発行者 豊島 激

印刷者 菅生 定祥

発行所 株式会社 光風社書店

東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話東京(281)〇二三八番
振替東京一二九一三番

落丁・乱丁は御取替いたします。

0093-018501-2265

目

次

秋の夜は

いけにえ

追われる者

悪党の世界

宿命

破邪の剣

旅立

七

四

三

一〇

一四

二

三

宇津谷峠

二三

運

二七九

闘志

三九

悪の力

三八三

虚々実々

四六

地獄の人

四七一

青山白雲

五三

装 幀 佐 多 芳 郎
挿 画 東 啓 三 郎

恋染め笠
(全)

秋の夜は

一

冬がもう隣まできている。

浅草馬道の縄のれん『山十』は、今夜も宵から一杯の客で繁昌していた。ここは北廓への通り道にあたり、うしろに奥山という盛り場をひかえ、前には猿若三座があつて、これから吉原へひやかに出かけようという振りの客も多いが、土地に住む下っ端芸人のたぐいもかなり飲みにきているようだ。

それらがみんな空樽へ目白押しに腰掛けて、思いおもいの皿盛りを前の台へ並べ、勝手なことをしゃべりあつて飲むのだから、なかなかたのしくもあれば、賑やかでもある。

「兄さん、お一ついかが」

夏目鮎太郎がそれらの客たちのおしゃべりを聞くでもなく、聞かぬでもなく、一人で銚子を半分ほどあけた時、ふいに左隣に肩を並べていた女が、自分の銚子を持ってこっちへ体を捻じ向けてきた。

こんな縄のれんへ女の客は珍しい上に、これは女芸人とも見える二十三四の、ちよいと水際立つた年増ぶりなので、さっきから客たちの目をひいていた。

「わしにくれるというのか」

意外だったので、鮎太郎が思わず目を丸くして聞くと、

「ええ、想い差し——」

と、女はひどく色っぽくて、如才がない。

女にはこれも芸人くさい三十がらみの男の連れがあつて、こつちを見ながらにやにやわらっている。目が細くて、口が大きくて、人の善さそうな、甚だ愛嬌のある顔だ。

「姐さん、わしも一つ差そう」

貰いつ放しでは悪いと思つたから、鮎太郎はすぐに自分の銚子を取りあげた。

「あら、あたしにくださるの」

「うむ、想われ差しのおかえした」

「すみませんねえ。そんなにやさしくいわれると、あたしなんだか本当に兄さんが想いたくなってくるな」

「いや、本当はいかん。冗談にしておいてくれ」

「おや、どうしてさ、兄さんはこんなおおぜいの前で、あたしに恥をかかせるんですか」

「そうじゃない。こう見えても、わたしには大望があるんだ」

「わかりました、敵討でしょう」

「少し違うようだな」

「そんな意地の悪いことをおっしゃらないで、少しぐらいの違いなら、敵討になすっておいたらどう

なんです」

「ああそうか。じゃ、敵討にしておくかな」

どこに本音があるものやら、ないものやら、どうせおたがい酒の上の軽口、それもあんまりあたりかまわず大声にというわけではなく、ほんの両隣へ聞える程度のやりとりだった、女の縹緞きりようが目立つ上に、いちいち仕草が大袈裟で、媚態びたいめくから、どうしても人目につかずにはいない。

二

「兄さん、お名前教えてくださらない。お厭——」

女はまたしても自分の銚子しやくで酌をしながら、色っぽい目をして見せる。

「おれは浪人さんで、夏目鮎太郎。姐さんの名はなんというんだね」

さばさばとしていて、いささかも銜てらいや気取りのない正直な鮎太郎だ。

「あたしはねえ、これでも田舎廻りのヅマ師で江戸屋紫、年はまだ十三なの。どうぞよろしく」

「十三にしちゃ、ずいぶんませてるなあ」

「ええ、とても苦勞したんですもの」

紫は澄まして答えて、

「兄さんはおいくつ」

と、来た。

「十三、七つに五つ足たしてみてくれ」

「あら、割りにお若いのねえ」

「うむ、あんまり利口のほうじゃないからな」

「御謙遜、——大望ってやつがあるから、阿呆あほうの真似まねしてるんでしょ」

「いや、阿呆だから大望のある真似をしてるんだ」

鮎太郎は自分の銚子で、おかえしに紫に酌をしてやったが、あいにく酒は盃に半分もみたなかった。

「やあ、失礼——」

「いいんですよ。ちょうどあたしのほうへ新しいのがきました。さあ、おほしなさいまし」

「せっかくだが、もう止そう。わしは酒は一本ときめているんだ」

鮎太郎が盃を伏せようとする手を、紫は白い器用な手を鮎のように躍らせて、おさえて、

「またこのあい太郎さんは、太夫さんに恥をかかせる」

と、無理に酌をする。

「違うよ、あい太郎じゃない。あゆ太郎、川魚の鮎太郎だ」

「ああ、あの塩焼きにして喰べる鮎なの」

「鮎ずしってのもあるね」

「喰べちまいたいなあ、あたし、この鮎太郎さん」

ほんのりと酒にうれたような体が、まるでもたれかかるように、あいている左手が男の膝にかかっている媚態だったので、

「馬鹿、いかげんにしろ」

前でさつきからじろとこっちを苦い顔つきで見ながら飲んでいた三人づれの、どこか道場の門弟とも見える逞しい剣客生けんかくせいの中の、中でもいかつい顔をした一人が、いきなりどすんと平手で台を叩きながら一喝かつしてきた。

台の上の皿小鉢が、地震のようにゆれたほどなので、一瞬近所の客はしいんとなって顔を見あわせる。

「鮎さん、相手になっちゃ駄目よ。こういう時は、つんぼになるのが、一番いいのよ」
びくともしないのは、当の紫だけのようだ。

三

「なにッ、つんぼになる。怪けしからんことをいうな」

剣客生は又しても噛みついてくる。

「ねえ鮎さん、なんの話をしていたところでしたっけねえ」

紫は取りあおうとしない。

「おい、こら、女、こっちを向かんか」

剣客生は躍起やくきになってきたようだ。

「どうぞお静かになすって下さいまし。ほかのお客さま方が迷惑なさいますから」
紫はにつこりとそっちを向きながら、たしなめるようにいった。

「そのとおりだよ。お静かに願います」

隅のほうから小声で弥次やじった奴がある。

「なにッ、誰だ」

劍客生はそっちへも嚙かみついて行こうとしたが、そう方々へ喧嘩けんかを売ってもしようがないと気がついたか、

「おい、女——」

と、又こっちを向いた。

「はい、あたしでござんすか」

「うむ、貴様だ」

「なにか御用でございますか」

「怪けしからん奴だ」

「まことに申訳まことございせん」

こんどは逆らわずに会釈えしやくしておいて、

「鮎あずさん、さあ、おほしなさいよ」

と、澄まして銚子しやうしを鮎太郎のほうに向ける。

鮎太郎はしようがないから、なるべく劍客生のほうを見ないようにして、盃を出す。

「こらッ、その男、やめんか」

「うるさい人ねえ、この人——」

紫が我慢できなくなったというように、じろりとそっちを向きなおる。

「なにッ、こいつ——」

「こいつもあいつもないでしょ。あたしがあたしのお金でお酒をのんでいるのに、なにがそんなに気に入らないんです。そんなに人のすることが目ざわりになるんなら、八百善へでも大七へでも行って、一座敷借り切ってゆっくりおのみなさいな。ここはあんた一人の買い切った山十じやないでしょ。縄のれんへきたら縄のれんのお客らしく、人のやきもちなんかやかないで、黙っておとなしくのんでお帰んなさいよ。おいだの、こらだの、女だのと、びた一文お前さんの世話になったこともない赤の他人に、あんまり大きな顔をおしでない。うるさくつてしょうがないじゃありませんか」

張りのある声で、それはすらすらと立てつづけにいつてのけた、全く歯ぎれのいいあざやかな啖^{たん}呵^かだった。

「ようよう、江戸屋あ」

隙^すさず手を叩いてうれしそうに離^{はな}し立てたのは、なんと紫の連れの、ちょいと道化^{どうけ}た顔の三十男だった。

四

「黙れッ、馬鹿ッ」

剣客生は三十男のほうへ一喝しておいて、

「おい、女、表へ出ろ」

と、紫を睨みつけた。

「おや、あたしが表へ出るとどうなるんです」

「武士に対して聞き棄てならぬ悪口雑言、叩ッ斬る」

「おお恐い。お断りしますわ。あたしはまだ死にたくありませんもの」

紫はあっさりかわす。

「ならん。表へ出なければ、ここで叩ッ斬るぞ」

劍客生の目はもう吊りあがっている。女にあんまり鮮かにあしらわれて、引っこみがつかなくなってしまうのだろう。

どうやら酒乱というやつらしく、このままではおとなしくおさまりそうもない。こんなところで無闇に刀を振りまわされては、ほかの客が迷惑をする。

「あなた方は、三人連れようですな」

鮎太郎は隣の劍客生に、おだやかに話しかけた。

「それがどうしたというんだ」

困ったことに、これも頭から喧嘩腰である。

「願わくば、その怒っているお連れの方を、なだめてあげていただきたいのですがな」

「なにッ」

「喧嘩はおたがい詰まらんです。ほかの人に迷惑をかけても悪い」